

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520219

研究課題名（和文）

宗教・文芸テキストを横断する〈中世日本の性と身体〉についての総合的研究

研究課題名（英文）

General research on the sexuality and the body about of Japanese Religious Texts in medieval Japan

研究代表者 小川 豊生（OGAWA TOYOO）

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：50169190

研究成果の概要（和文）：中世日本における身体や性に関する見方は、近代以降とは大きく異なったものがある。本研究は、古典の注釈テキスト、仏教・神道テキストを中心に、未開拓の諸文献の発掘を通じて、中世特有の身体や性をめぐる思考形態を浮き彫りにした。これまで異端として扱われてきた身体や性にかかわる言説が、じつは広く中世人の知的教養の基盤を形づくるものであったことが本研究によって明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：I have attempted to analyze the problem of physicality as “sexuality” by examining such materials as the anecdotes about the Religious Texts. The problem of Sexuality and Body has been discussed only from the viewpoint as heterodoxy. However that’s altogether wrong. This studies is a result to change the way about the body theories in the medieval Religious Texts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：日本中世・身体論・古典注釈・神道・仏教学

1. 研究開始当初の背景

（1）近年、歴史・文学の領域において〈身体〉への関心が高まりを見せている。たとえば五味文彦『中世の身体』、倉地克直『性と身体の近世史』、総合女性史研究会編『日本女性史論集 9 性と身体』、小嶋菜温子編『王朝の性と身体』、同『源氏物語の性と生誕』、河添房江『性と文化の源氏物語』などが挙げられるが、その傾向は本研究が対象とする中世の古典学・宗教学においても同様で、田中貴子『外法と愛法の中世』、阿部泰郎『湯

屋の皇后 中世の性と聖なるもの』、松岡心平『宴の身体』といった諸論を挙げるができる。また総合的な観点から性と身体を論じた山折哲雄『愛欲の精神史』なども共通した関心の地平から発想されたものであった。こうした多岐にわたる研究動向を踏まえると、当該テーマに基づく古典学研究の流れは、今後一層の広がりや深化が期待されることは間違いないところだろう。とくに、中世の古典学・宗教学における性と身体の研究は、緒についたばかりであり、今後、新出資料に

基づいて、いわゆる中世知の教養基盤を広く視野に入れた、より踏み込んだ研究が求められる状況にあるといえよう。

(2) 上記の諸研究を通覧するとき、はたして古代・中世の人々の身体観を正確に把握するための知的基盤そのものが十全に整備・確保されてきたかどうか、疑問を感じる点が少なくない。とくに、本研究がテーマとした中世の性や身体に関わる言説は、これまで通常「異端」的なものとして扱われることが多く、正面から研究されることのない状況にあった。しかし、近時、未開拓の文献を対象とする新しい研究動向が見られるようになり、それらによって従来の通念を打破しうる新研究が可能となりつつある。これらの資料に基づき、中世の人々の観念の実態により即した新たな身体論を構築すべき段階にあり、またさらなる諸文献の発掘による新研究も求められる状況にある。

本研究は筆者（本研究代表者）による既発表の論考「愛染明王と性の神学——『瑜祇経』解釈学を起点とする中世日本の性と身体——」（『説話論集』第十六集、清文堂、2007）をはじめとする一連の「性と身体」をめぐる研究を基盤として、如上の問題意識のもとに進められていった。

2. 研究の目的

本研究は、未開拓の諸文献の発掘を通じて、中世日本における性と身体をめぐる知的教養の基盤を新しい観点から明確化し、中世的思考の特質の析出、および近現代の身体観の転換をも可能にする視点の獲得を目指した。

筆者（本研究代表者）は、十三世紀から十五世紀にわたる『瑜祇経』注釈の諸テキストを基軸とした、これまでの中世日本における「性と身体」をめぐる言説発掘の研究を通じて、中世における身体論の地平が、『瑜祇経』や『理趣経』あるいは『菩提心論』といった特定の傾向を有する仏典をめぐる解釈（注釈）活動のなかで形づくられるものであり、これらの注釈テキストを対象とする本格的な研究を欠いたままでは、如上の身体論的アプローチも、充溢した深化をとげることにはできないことを確信するに至った。

たとえば、十二世紀から本格化し、中世を通じて日常的に実践された「愛染明王法」なる修法の根拠となったのは空海が請来した『瑜祇経』であったが、同経は十二世紀後半以来、多様な解釈（注釈）の対象となるのであり、それら注釈テキストのうちには中世の人々の〈性と身体〉をめぐる教養のまさに基盤的な言説が縦横に展開されている。それら注釈にかかわった、実運・勝賢・成賢・守覚・実賢・憲深・頼瑜といった醍醐三宝院流の学僧たち、あるいは、承澄・澄豪・光宗・行遍

といった台密穴太流を形成する学匠たち、東福寺において禅密の宣揚に巨大な足跡を残した円爾弁円、その弟子で、名古屋真福寺（大須文庫）に現存する『瑜祇経』や『菩提心論』等の注釈書奥書に多くその名を残す仏通（癡兀大慧）、さらには神奈川県金沢文庫に多くの『瑜祇経』や『理趣経』注釈書の手沢本を残した劔阿、身体論・胎生学の中世における始発に位置づけられるというべき高野山真言密教の巨匠覚鑊、等々をめぐる研究が本研究課題には不の遂行には可欠である。本研究ではこれら学匠たちの残した多くの注釈テキストの発掘とその読解を中心に進めることにした。

如上の人物に加えて、高野山には禅林寺静遍・実賢・守覚に受法した学匠道範も現れ、『相応経（瑜祇経）秘決』『菩提心論鈔』『駄都鈔』『理趣積聴海鈔』などの〈性と身体〉論に不可欠のテキストを写本として多く残している。道範の著述は多く金沢文庫・高野山大学図書館等に所蔵されており、本研究の課題に即した緻密な写本研究も重要な目的として挙げられる。

また、本研究では仏典注釈書の掘り起こしを一つの柱としたが、それだけを対象とするものではない。すでに拙論「中世神学のメチエ——『天地霊覚秘書』を読む——」（共編著『「偽書」の生成中世的思考と表現』森話社 2003）、「十三世紀神道言説における禅の強度」（『文学』2005.11/12号）などにおいて、禅と神道がきわめて濃密な交渉を遂げていた事実を解明したが、この禅・神道・密教の合流によって形成される諸テキストのうちにも〈身体論〉の観点から見過ごすことのできない重要な諸問題が浮かび上がってくる。たとえば『瑜祇経』は伊勢神道で生成・展開したいわゆる「伊勢灌頂」の世界とも密接な関係を形づくっている。また、『日本古典偽書叢刊第一巻』（小川豊生編著）において注釈研究の対象とした『和歌古今灌頂卷』や『伊勢物語髓脳』、あるいは『玉伝深秘卷』『伊勢所生日本記有識本性仁伝記』などの古典注釈テキストにも〈性と身体〉をめぐる興味深い記述が多見されるが、その記述の分析から判明するように、禅・密教・神道は不可分のかたちを伴って文芸との合流を達成していたのであり、こうした中世特有の思想的実情を前提に、宗教テキストのみを対象とするのではなく、広く説話・物語・和歌・注釈書等の文献をも視野に入れることで、〈中世日本の性と身体〉のテーマをより包括的な研究領域へと確立していくことを目指した。

また如上の研究において、「東アジア的規模の探求」が求められるのは必然である。禅学の用語として多用され、円爾や覚心によって本格的に使用される「靈性」は、その出自となる中国・朝鮮における華嚴禅の思想史的

流れを視野に入れることで、一段と魅力的なテーマとして大きく成長することは間違いないであろう。本研究のまとめとして、東アジアにおける「霊性」と「身体論」との架橋という課題にも先鞭をつけたいと考えた。その際、研究作業範囲をいたずらに拡大することなく、かつ研究内実の拡散を避けるために、韓国所蔵の中国漢籍の調査に限定した。近時、延世国学叢書第 52 種として『韓国所蔵中国漢籍総目』（全六冊、全寅初主編）が韓国学古房より刊行されたが、当該目録、あるいは東国大学校中央図書館古書目録等を糸口として、韓国現存の禪・仏書にみる「霊性」論＝「身体」論の探求が可能であると考え、まずは韓国現存の仏書の調査・分析を行い、向後における本研究課題のより大きな展開への端緒を切り開くことをめざした。

総じて、〈日本中世における性と身体〉なる問題構成は、これまで、いわゆる「邪教立川流」に代表されるように、おおよそ異端的なものへの関心から研究されることが多かった。しかし、本研究の目的は、こうした従来の視点に立つのではなく、むしろ主流・正統な思想史の流れのなかにこそこの問題を位置づけ直すことを目指すものであり、そこにこそ本研究の固有性と研究史的価値を定位したいと考えた。そうした明確な目的の達成のためにも、未開拓の諸文献の探索や、日本に限定することのないよりグローバルな視点からの探求を心がけた。

3. 研究の方法

全体として本研究は、諸文庫・図書館等に所蔵された写本・版本類の調査、および復写の収集を中心として進められた。

上記のように、本研究は、中世の古典テキストと、同じく中世に生成した仏典注釈書、神道テキスト等とを横断的に扱うことによって、〈日本中世における性と身体〉をめぐる諸問題を包括的に探究することを目的とする。それによって、これまでともすれば異端的な関心から研究されることが多かった当該テーマを、むしろ正統的・主流的な言説史のなかへと位置づけ直すことが可能になり、ひいては宗教・文芸の領域を貫通する新たな「身体論」を構築することが可能となるものと考えた。（なお、本研究は、前記「研究目的」及び後記の「研究業績」に挙げた拙論の発展・具体化として位置づけられるものである。）如上の目的のもとに、本研究では、具体的には内外にわたる図書館・諸文庫等に所蔵される関係文献（写本）の探訪・調査・写真収集・複写収集、および「身体論」にかかわる一般研究書籍（海外の研究も含む）・専門研究書籍の収集を主たる前提作業とし、そのうえで全体的な考察を深め、論文・著作として成果を発表することを心がけた。

具体的には、本研究は、以下の三項目の内容にしたがって遂行した。

①真福寺文庫・金沢文庫・高野山大学図書館・叡山文庫等に所蔵される仏典注釈書の写本テキスト（『瑜祇経』『理趣経』『菩提心論』や五臓論にかかわる諸文献）を中心とする調査・収集・研究。

②物語・和歌・注釈書等のテキスト（『伊勢二門極理灌頂撰』『伊勢仏神伝記巻』等の諸本研究）を対象とする調査・収集・研究。

③神道・禪・説話集等の主として「霊性」の語誌にかかわる文献の調査・研究、および本研究に係わる韓国現存の仏書の調査・収集・研究。

なお、①②③のいずれの研究においても、関連資料が国文学研究資料館のマイクロ資料中に所蔵されているものについては、同館における調査・閲覧を経て紙焼き写真・複写資料の収集につとめた。

それぞれの年度における研究方法は以下の通りである。

〈平成 21 年度〉

上記①を実行した。真福寺文庫はすでに『真福寺文庫善本叢刊』が二期にわたって刊行されるところであるが、同叢刊中には本研究が対象とするテキストの収載を見ない。本研究において調査した同文庫所蔵の資料を具体的に挙げれば、道範述『相応秘訣』四帖、『瑜祇経口伝』、『瑜伽瑜祇経疏』、『瑜祇経咩字秘积』、『瑜祇経印明秘訣』、『瑜祇経眼目抄』、道範『理趣経鈔』、仏通禅師所持・能信記『菩提心論随文正決』七帖、『如法愛染王法』『駄都秘訣』『灌頂秘口決』三帖などが挙げられる。

金沢文庫所蔵の資料については、『金沢文庫資料全書』等によって既に翻刻紹介されたもの以外の、道範『瑜祇経口伝』、同『菩提心論聞書』、実範『菩提心論聞見鈔』、覚鑿『菩提心論題』、道範『瑜祇蘇・覽口決』、『理趣积口決抄』、『理趣醒聞鈔』、『瑜祇経秘訣』等を中心とした関連資料の調査・収集を行った。

高野山大学図書館所蔵の資料については、未紹介に属する『瑜祇経私記』、『愛染明王法』、『両頭愛染明王法』、『愛染王聞書』、『愛染王口伝』等の主に愛染王法に関連する写本・マイクロ資料の閲覧・調査、および復写の収集を行う。その他、叡山文庫・京都大学図書館等に所蔵の関連資料群の調査・収集につとめた。

また、本研究をよりアクチュアルなものにするため、近時刊行された「身体論」に関わる関連書籍（海外研究の翻訳文献も含む）の収集にもつとめた。

〈平成 22 年度〉

上記②を実行した。ここでは、和歌・物語・注釈テキスト、特に『日本古典偽書叢刊第一

巻』において扱った諸文献に関連するテキスト群を対象に、本研究の主題となる〈性と身体〉の視座から考察を試みた。例示すれば、京都大学図書館所蔵になる『伊勢伝神記』や『伊勢二門極理灌頂撰』などが該当するが、とくに前者は叡山文庫（天海蔵）にも『伊勢伝記巻』（一冊）として所蔵され、また東寺宝菩提院蔵『御流伊勢伝神記巻』、高野山大学図書館蔵『伊勢伝神記』など、いくつかの写本が伝存することを確認した。また諸文庫探訪を通じて、諸本の収集・整理を行い、中世芸文資料（古今集関連の秘伝書を含む）における〈性と身体〉の言説を闡明した。さらに「二根交会」「赤白二滯」「男女和合」といった〈性〉の言説が横溢するこうした伊勢灌頂・古今灌頂系テキスト群を掘り起こす作業を通じて、仏典注釈の探求を柱とした①の研究成果に宗教文芸テキストの世界からの研究視座を加えることを目指した。

（平成 23 年度）

上記③を実行した。ここでは、神道テキスト・禅学資料・説話資料の収集・整理を通じて、とくに「霊性」の語誌研究を起点とする身体論の展開を目指した。具体的には、無住・慈遍・良遍・証定等にかかる文献の収集につとめた。当該年度においても、①②であげた諸文庫・図書館等への探訪・調査・収集を実施したが、とくに禅学資料の探求にあたっては、「東アジア」にわたる「霊性」研究の課題を具体化すべく、海外（韓国）文献の調査・複写収集にもつとめた。具体的には東国大学校図書館への文献探訪を試みた。『韓国所蔵中国漢籍総目』や『韓国仏書解題辞典』等による文献伝存事情の確認を経て、資料探訪を行った。

以上、三箇年にわたる研究計画のもとに、順次本研究の庶幾するところを実行した。なお、資料収集に関して、各年度内に完遂しえなかったものについては、後続する年度においても適宜収集につとめた場合がある。

4. 研究成果

（1）これまで殆んど未開拓の領野であった『瑜祇経』『理趣経』『菩提心論』等の注釈書や古典注釈テキストの発掘を通して、日本中世における性と身体の言説を総合的に研究する基盤を創出することができた。とくに『瑜祇経』の注釈世界を通じた身体論の地平を切り拓くことができたのは本研究課題の実行によって得た大きな成果であったと考える。具体的にはそれらは、次項 5 で記した業績のうち、論文②「修法空間と身体の建立」、共著書①『東アジアの今昔物語集』、②『中世の学芸と古典注釈（中世文学と隣接諸学 5）』、③『中世神話と神祇・神道世界（中世文学と隣接諸学 3）』に所収の論考、および学会発表①「瑜祇塔の中世」、③「修法空間と秘儀の建立」に結実さ

せることができた。

（2）「赤白二滯」や「胎内五位」に代表される胎生学的知の諸問題に関して、上記 3 で挙げた諸文献の裏付けのもとに既成の研究を更新し、たんなる異端としてみる研究史上の偏見を克服することができた。とくに邪教立川流のイメージが蔓延した従来の研究地平に異議を唱え、中世の人々の性や身体に関する把握の在り方に即した見方を提示することができた点、大きな成果であったと考える。なお、論文業績①「〈赤白二滯〉考——中世日本における胎生学的知の根源をもとめて」としてその具体的な成果を発表することができた。

（3）愛染明王やその修法である愛染法の起源の問題を明らかにし、その基底に据えられた性と身体をめぐる思想的核心を明らかにするという当初の目的が達成できた。とくに業績のうち共著①『東アジアの今昔物語集』において、愛染明王の来歴を論じ、日本院政期の修法世界と東アジアとの関わり、及び愛染法における身体論的地平を明らかにすることができた。なおまた、院政期の密教修法の世界と後期密教との関係は、「性と身体」をめぐる本研究課題と深く関わっているが、この後期密教の受容をめぐる問題をどのように把握すべきか、上の論考においてある程度の見通しを示すことができた点も、重要な成果であったと考えている。

（4）日本中世の身体と霊性をめぐる諸問題について、既成の研究の曖昧さを払拭し、文献に基づく考察のペースをつくることができた。それを通じて、近時隆盛しつつある西欧中世の霊性研究にも比し得る日本研究の地平を創出することができた。その具体的な成果として、学会発表②「東アジアにおける文殊信仰と行基説話」や、共著書④『漢文文化圏の説話世界（中世文学と隣接諸学 1）』において、東アジアにわたる「霊性」の問題を大陸の文献資料をもとに論究できた。

（5）なお本研究成果は、そのまとめとして『中世日本の神話・文字・身体』の題名のもとに単著書のかたちで刊行する予定である。上記の論考もそのうちに収めることになるが、その他、本研究にかかわる既発表論考をも加えて、すでにその計画の大よそは完了済みの状況にある。本報告書には刊行を間に合わせることはできなかったが、研究機会を与えられた成果はそこに集約されることを付け加えておきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①小川豊生、「〈赤白二滯〉考——中世日本に

おける胎生学的知の根源をもとめて」、撰大
人文(撰南大学紀要)、査読有、第19号、2012.6
刊行予定

②小川豊生、「修法空間と身体の建立——『瑜
祇経』解釈学の世界から——」、説話文学研
究(説話文学会)、査読有、第45号、2010.7、
19-28

〔学会発表〕(計3件)

①小川豊生、「瑜祇塔の中世——法性塔婆図と『瑜
祇経』解釈学の世界——」、仏教文学会、2011.9.17、
常翔学園大阪センター

②小川豊生、「東アジアにおける文殊信仰と
行基説話」、国際シンポジウム(北京日本学
研究センター・立教大学日本学研究所主催)、
2010.3.19、北京日本学研究センター(北京外
国語大学内)

③小川豊生、「修法空間と秘儀の建立——愛
染法と愛染堂をめぐって——」、説話文学会、
2009.6.20、奈良女子大学

〔図書〕(計4件)

①小峯和明編、勉誠出版、『東アジアの今昔物語集』、
2012、736ページ

②前田雅之編、竹林舎、『中世の学芸と古典注釈(中
世文学と隣接諸学5)』、2011、629ページ

③伊藤聡編、竹林舎、『中世神話と神祇・神道世界
(中世文学と隣接諸学3)』、2011、638ページ

④小峯和明編、竹林舎、『漢文文化圏の説話
世界(中世文学と隣接諸学1)』、2010、541
ページ

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小川 豊生(OGAWA TOYOO)
撰南大学・外国語学部
研究者番号：50169190

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：